

擬音語の語彙化に関する日中両言語の特徴

武田 みゆき

0. はじめに

前回の小論文武田 2000 では、擬音語が実生活上のさまざまな音である実態音と、一般の語彙との間に位置するとし、それらからの遠近によって、擬音語¹の「語彙度」を考えた。そして、現在擬音語として使用されているものの中で、表現の対象となる実態音の違いによる（特に「人間の活動に関する音」と「外界音」について）語彙度の違いから「語彙化」を考察した。語彙度とは、言語の成分である一般の語彙としての程度を指し、語彙度が低い傾向にあれば語彙化は進んでおらず、反対に語彙度が高い傾向にあれば語彙化は進んでいるとみなす。²

本稿では、この語彙化の概念をもとに、日本語と中国語の一般的な語彙化の特徴について考察する。以下第1節では、日中両言語における擬音語の音韻と意味から語彙化の特徴を、また第2節では、一部武田 2000 での語彙度を示す数値の算出方法を利用し、両言語の擬音語の語彙化に関わる要因を考察する。

1. 各擬音語の特徴

1-1 音韻

日本語の擬音語の中に、異なる二つの反復語のそれぞれの語基を結合して別の一つの語を合成したと考えられるものが存在する。例えば以下の例である。

- | | |
|--|------------|
| 1) a. <u>カラ</u> カラ+ <u>コロ</u> コロ→カラコロ | karakoro |
| b. <u>ガサ</u> ガサ+ <u>ゴソ</u> ゴソ→ガサゴソ | gasagoso |
| c. <u>ガタン</u> ガタン+ <u>ゴトン</u> ゴトン→ガタンゴトン | gataNgotoN |
| d. <u>カタ</u> カタ+ <u>コト</u> コト→カタコト | katakoto |

1a)~1d)では、それぞれ、「カラ」と「コロ」、「ガサ」と「ゴソ」、「ガタン」と「ゴトン」、「カタ」と「コト」が結合して異なる二種の音の連続を表現していると考えられる。

このような合成語の例では、前項と後項の子音は同じで、母音が /a/ と /o/ に

なることが多い。この母音 /a/ と /o/ について、田守 1989 は、以下の 2) のような語例をもとにつぎのような知見を示している。

- 2) a. bari-bari / bori-bori せんべいを食べる。
 c. baaN / booN と何かが爆発した。
 b. gaaN / gooN と鐘がなる。
 d. gatuN / gotuN と頭を柱にぶつけた。

「/a/ は、音のひろがり、/o/ は、反対に内にこもった音を表すと考えられるが、これは両者の音声学的特徴と関連している」としている。つまり、/a/ は、低・中舌・非円唇母音であるため、口腔を大きくあけ、口腔の中央部から前方に向けて発音するので音の拡がりを感じ、/o/ は、中・後舌・円唇母音であるため、/a/ よりは大きく開けず、唇を丸めて口腔の後方で発音するので、口腔内で共鳴してこもった音になるというのである。

以上のことから、これらの合成語において、子音は同じで、母音のみが異なるのは、母音 /a/ と /o/ によって当該実態音の特徴を表し、カラカラ（硬い物や、かわいた物がうち当たる音）とコロコロ（小さくて丸い物が転がる音）のように性質の異なる二種の実態音を同時に表現しようとすることに由来するものと思われる。

中国語の擬音語においてもこのように、音の一部が変わるものが存在する。以下 3) に例をあげる。

- | | |
|------------|------------------|
| 3) a. 嘀哩嗒啦 | dilidala |
| b. 嘀哩啲噜 | dilidulu |
| c. 噼哩噗噜 | pilipulu |
| d. 劈哩啪啦 | pilipala |
| e. 叮铃当啷 | dinglingdanglang |

ここでも前半の二音節と後半の二音節では子音は同じで母音が異なる。しかし、これらのうち e. 叮铃当郎を除く全てが、二つの擬音語が結合してできたものではなく、従って異なる二種の実態音を表現しているわけでもない。また、e. 叮铃当啷は、日本語と同様、叮铃と当啷の二つの擬音語が結合してできたものであるが、もとの二つの擬音語も結合後の合成語も「鈴やベル、またはそのような響きの金属音」或いは、少なくともそれに近い音を表現しているという共通点を有している。これらのことから、中国語の擬音語においては母音の違

いは顕著な音の違いを表していないことが窺い知れる。

また、日本語の擬音語では有声音と無声音の対立が多くみられる。以下のような例である。

- | | |
|--------------|----------------------------|
| 4) a.カタッ／ガタッ | <u>k</u> ataQ／gataQ |
| b.カラカラ／ガラガラ | <u>k</u> arakara／garagara |
| c.コトコト／ゴトゴト | <u>k</u> otokoto／gotogoto |
| d.カサコソ／ガサゴソ | <u>k</u> asakoso／gasagosos |

一般に日本語において、有聲・無聲、即ち清濁の対立は、清音が軽やかであり、濁音は重い印象を与えるが、加えて不快や負の意味も生じさせる。一般的な語彙の清濁音について、鈴木 1962 は、タマとダマ（粉などをこねる時、不手際のためにできるタマ）、カニとガニ（蟹の内臓で食用とならない部分）サマとザマなどの対立を例にあげて、濁音が不快や負の意味を有し、同時に清音から濁音への一方向的な派生であることを指摘している。これは、擬音語においても同様で、濁音は、重い音、鈍い音、大きな音などを表す³ことに加えて不快や負の意味も表しているといえよう。例えばハタハタは、布や旗などが単に風にはためいている音を表すが、バタバタになると立て付けの悪い戸が強風に煽られてたてるうるさい音を表している。

この擬音語における清濁の対立は、指示する対象音が同範疇にあることが基本条件であることは言うまでもない。例えば、ホン（本）とボン（盆）などの対立は清濁の対立とはみなさないからである。このようにみていくと、日本語の擬音語にみられる清濁の対立は、同類の実態音の特徴を主に母音によって表現し、子音の交替によってその属性である音の大小、快不快、正負などを表現しているといえることができる。

中国語の擬音語においても、有気・無気の対立がみられる。例えば、咣啷 *guanglang* で表わされる実態音の大きさを強調する時は、kuanglang と有気音になることがある。⁴これは、有気音が、無気音に比べて気音が強く、そのことによって実態音の大きさが強調されるものと考えられるが、このような有気と無気の区別には、「かなりあいまいな面もあり、個人や地域差もある⁵」とみてよからう。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 5) a. <u>b</u> ada／pada | b.gaba／ <u>k</u> aba |
|-------------------------|----------------------|

例えば 5) の例におけるように、有気・無気が自由に使用されることから、中国語の擬音語における有気・無気の違いは、日本語の擬音語における有気・無声の違いが有するような意味を付与されていない。

一方、中国語の擬音語には、日本語の擬音語の有声・無声の対立とは反対の現象（同一語基から派生したものの中で、子音が同一で、母音が異なるもの）を示すものが多い。

- | | |
|--|--------------|
| 6) a. <u>dilidala</u> / <u>dilidulu</u> / <u>dilidoulu</u> | (パラパラはじく音) |
| b. <u>dingdingdangdang</u> / <u>dingdingdongdong</u> | (ハンマーなどで打つ音) |
| c. <u>xixilala</u> / <u>xixilili</u> | (パラパラまばらな音) |
| d. <u>zhiliuliu</u> / <u>zhilulu</u> | (たばこを吸う音) |

以上の 6a)～6d) では、派生後の母音の交替によって表現する実態音も微妙な違いはあるものの、各組の擬音語はそれぞれおおよそ同類の実態音を表現している。

以上のことから、中国語では、日本語とは逆に、同種の音声を子音を中心に特徴的にとらえ、音声間の微妙な違いは母音で表現するか、或いは母音を無視して子音のみで表現していることがわかる。例えば、「物が水に落ちる音」という同種の実態音を日本語ではポトン potoN、ドボン doboN など母音は同一で子音が異なる音で表現するが、中国語では、噗通 putong や扑騰 puteng など子音は同一で母音が異なる音で表現する。

このことは、音声知覚を物理的実験から考察している小谷 1993 らの「日本語話者が母音、中国語話者が子音に重点をおいて音の情報をとりいれている」とする知見と関連があるように思われるが、この点についての詳細な検討は今後の課題とする。

この他、中国語の擬音語には漢語拼音表記の枠外のものも存在する。例えば、bia (ピシャリ)、biang (銃声)、mer (汽笛の音)、pia (ピシャリ、バチャッ)、rou (弾丸の音)、tiang (銃声、金属のふれあう音) などがそれであるが、日本語には音韻の枠外の擬音語はみられない。

1-2 意味

中国語の擬音語では、日本語のそれに比して多義のものはるかに多く、また、一つの擬音語が表現する実態音も日本語に比べて多種にわたっている。例

えば嗷嗷 aoao は、実態音①人の叫び声、②動物のほえ声、③風のうなる音などを表しているが、これを日本語の擬音語で表現すると、ワーワー、ガオー、ゴーゴーとなる。日本語の擬音語では、「ワーワー」は人の叫び声のみを表し、動物のほえ声表現することも、風のうなる音を表現することもない。同様に、「ガオー」や「ゴーゴー」も発生源の異なる他の二種の実態音を表現することはなく、これら日本語の擬音語は、それが表現する対象（実態音）との結びつきはかなり固定されている。しかし、この三種の実態音は、音声としては「大きなうなる音」という共通の特徴をもっている。

また、日本語で馬の蹄音を表現する擬音語は、「かっばかっば」「ぱかぱか」「ぱっぱか」「ぽっくりぽっくり」などであるが、これらはいずれも馬の蹄音のみを表し、一般的には、人間の身体音に使用されることはない。ところが中国語で馬の蹄を表現する擬音語「叭哒 bada」「哒哒 dada」「得得 dede」「噔 deng」「滴嗒 dida」「滴得 dide」「咔嚓咔嚓 kadengkadeng」「啪 pa」「踏踏 tata」「踢踢踏踏 tititata」などは、いずれも同時に人間の足音にも使用される。さらに同時に「まぶたの音」や「心臓の音」「雨の音」「時計の音」を表現することもあり、対象となる実態音は広範囲にわたっている。これは、実態音である蹄の音を馬と連想させているのではなく、音をそのまま捉えて擬音語で表現しているからであると思われる。このことは、日本語においては人や動物の声帯を通して発するものを「声」と呼び、それ以外のものを「音」と区別しているが、現代中国語においては特に区別せず、両者とも「声音」と呼ぶことからいえよう。

以上の考察から、中国語の擬音語は、日本語のそれに比して、より実態音が意識されており、同時に一般の語彙からは遠くなり、その結果として語彙化の弱い傾向をみてとることができる。反対に日本語の擬音語は、言語によって概念化された対象がより意識されて一般の語彙に近くなり、語彙化の強い傾向をみてとることができる。

2. 語彙化に関わる要因

前述までの考察により、日本語では中国語の場合に比べて擬音語が語彙化されやすいことをみてとることができたが、この両言語における語彙化の程度の違いは、どのような理由によるものであろうか。

両言語間における語彙化の程度の違いの理由の一つとして、日本語の音韻体系が、中国語のそれより外界の音声を組み入れ易い構造をしているということ

が考えられる。前述のように、日本語には見られないが、中国語には音韻体系を逸脱した擬音語も存在することから、少なくとも日本語と比べて、中国語では音韻体系が擬音語を組み入れにくい構造である可能性は高い。

また、外界の音声を当該言語の音韻体系に組み入れやすいか否かという問題は、音韻体系の構造という要因の他に、各言語話者が、当該実態音をどのように認識するかという問題にも関連する。つまり、語彙化の強い日本語では、日本語話者が外界の音声を日本語の音韻体系の中の一つの音として認識し、中国語では、中国語話者がその音韻体系の中の一つの音として認識していないと見ることもできよう。このことについて、角田 1974 は、機器を使用した大脳レベルでの言語処理機能を調査した「優位性テスト」の結果から、世界の言語を「単脳言語」（日本語パターン）と「複脳言語」（印欧語パターン）の二つに分類している。つまり、「人間の脳では、通常言語機能は、左脳に局在し、右脳は言葉以外の音楽・機械音の受容に貢献している」というこの基本的な左右の機能差は世界のどの言語にも共通しているが、さらに細かく検討すると、「日本語母語話者と印欧諸語母語話者では、大きな差がある」という。角田によると、日本語のような「単脳言語」では、言語音とともに、人の声、動物の鳴き声など、音楽・機械音以外のあらゆる自然音も言語半球で処理されるが、印欧諸語などの「複脳言語」では、音節を構成している言語音以外は全て非言語半球で処理されるという。そして、中国語も印欧諸語と同様、この「複脳言語」に含まれるとしている。もしこれが事実であるとしたら、語彙化の強い日本語の擬音語であっても、音楽・機械音に限っては、他の音に比して、語彙化は弱くなることとなる。

ここで、音楽・機械音についての語彙化の程度を検証するために、武田 2000 での各実態音別分類 (a. 人の声、b. 身体音、c. 動物の鳴き声、d. 動物の身体音、e. 自然音、f. 物音) と、「全体における一義の擬音語の割合」から語彙度をみることを用いる。⁶つまりその割合が大きければ語彙度は高く語彙化は強い。反対に小さければ語彙度は低く語彙化は弱いとみなす。日本語と中国語の各資料⁷について、各実態音別に全体における一義の擬音語の割合を示したのが以下の表 1 である。(単位は%、少数点第二位を四捨五入) 例えば、中国語に関する資料 1 に掲載されている擬音語で「啊哈哈」「啾噜」「哼咪」などは、ある一種の人の声しか表さないのが「a. 人の声の一義」として計上し、また「嗷嗷」「喳喳」「咪」などは人の声以外にも表すので、「a. 人の声の一義以外」として計上した。

このように採集した結果、前者の擬音語が 42、後者の擬音語が 73 であったことから、全体における一義の割合は 42/115 から 36.5% を算出した。なお、音楽・機械音は、ここでは f. 物音にあたる。

表 1

音 資料	a. 人の 声	b. 身体 音	c. 動物 の鳴き 声	d. 動物 の身体 音	e. 自然 音	f. 物音
1 (中)	36.5	12.7	30.0	6.3	13.4	5.7
2 (中)	37.5	19.0	42.9	6.3	9.7	8.6
3 (日)	63.8	34.2	50.0	15.0	34.1	9.2
4 (日)	76.9	35.3	37.9	16.2	50.3	12.1

表 1 で、全体における一義の割合の値を e. 自然音と f. 物音で比較すると、中国語に関する資料 1・2 では、それぞれ 13.4% と 5.7%、9.7% と 8.6% で有意な差は認められないが、日本語に関する資料 3・4 では、34.1% と 9.2%、50.3% と 12.1% で、明らかに f. 物音は e. 自然音よりも全体における一義の割合は小さく、従って語彙度も低い。しかも他の a. ~d. の音と比較しても、中国語では特に f. 物音の特徴は認められないが、日本語では、f. 物音は、他のどの値よりも小さいことが認められる。また、この f. 物音における一義の割合の値は、中国語 5.7% と 8.6% に対して、日本語 9.2% と 12.1% となり、他の a. 人の声 b. 身体音 c. 動物の鳴き声 d. 動物の身体音 e. 自然音における日中の違いに比して、極めて小さい。これは、中国語、日本語両言語のいずれにおいても、f. 物音は語彙化されにくいことを示しており、「各言語話者の音声の認識によっても語彙度は異なる」とする角田の見解を裏付けている。ただし、表 1 の c. 動物の鳴き声に関しては、両言語間に明確な有意差があるとは言えず、検討の余地が残される。

c. 動物の鳴き声は、両言語において、d. 動物の身体音に比して全体における一義の割合の数値が高く、従って語彙度が高いが、この理由は何であろうか。a. 人の声は調音器官を経て発声される音声であるために、各言語の音韻体系に組み入れて認識することが容易であり、その結果として他の音声よりも語彙化されやすい¹⁶⁾が、c. 動物の鳴き声が、それに準じて、d. 動物の身体音より語彙として取り入れられやすいというわけではない。たとえその鳴き声が、動物の声

帯などの調音器官を経て産出された音ではあっても、それはあくまでその動物のものであって、人間の産出する音声や語彙であるとみなされることはないのである。

そこで、このことを対象となる実態音の人間との「親密度」の側面から考察してみることとする。人間との親密度には、空間的親密度と心理的親密度が考えられる。まず、空間的親密度、すなわち空間的距離については、動物の鳴き声の存在する場所に、その動物の身体音も存在するのであり、両者間に空間的距離の違いはほとんど無いと考えられる。そこで、c. 動物の鳴き声が d. 動物の身体音に比して語彙化されやすいのは、心理的親密度が高いことによるものとみることができる。つまり動物においても、その発する「声」のほうが、その身体から生じる「音」に比べて人間にとって、心理的により親しみやすいからであるといえそうである。

表1でc. 動物の鳴き声において、全体における一義の割合は資料1、2、3、4でそれぞれ、30.0%、42.9%、50.0%、37.9%であり、日中両言語間の語彙化に、他のa.~f.の音のように特徴的な傾向は認められず、同じ日本語に関する資料である資料3と4でも大きく異なる。これは、前述のように動物の鳴き声の語彙化が心理的親密度に関連していることを考えると、動物の種類によって、その鳴き声に対する心理的親密度が両言語間で異なり、また取り上げる動物が異なることによって各資料間でも違いがみられるものと考えられる。各資料におけるc. 動物の鳴き声に挙げられている擬音語の一義と多義とされている動物の種類と数について表したのが、次の表2である。例えば、中国語に関する資料1から採集した「啊」はカラスの鳴き声しか表さないので、カラスの「一義」に計上し、「哇」はカラス以外にもカエルの鳴き声も表すのでカラスの「多義」に計上し、同時にカエルの「多義」にも計上する。各標本数が多くないため、厳密に論じることは危険だが、少なくとも傾向をみることは可能であろう。

表 2

資料		1 (中)		2 (中)		3 (日)		4 (日)	
		一義	多義	一義	多義	一義	多義	一義	多義
動物	鳥類								
	鳥	4	18	4	4		5		8
	ツバメ		2	1					
	カラス	1	2	1	2	1		3	
	カッコウ	1							
	ニワトリ	1	2		2	1		1	
	スズメ					1		1	
	雛鳥					2			
	ハト				1	1		1	1
	山鳩					1			
	アヒル		1		2		1		1
	ヒバリ							1	
	カエル		8		4	1	1		1
	昆虫	虫		8		1		1	
コオロギ		1				1		2	
マツムシ					1				
キリギリス	1		1						
セミ	1		1			1			
スズムシ		1				1	1	1	
獣類	うなり声	1	3		2	1			
小動物			2						
ウマ	2	2	1	1	1				
ネコ	2	1	1	1	1				
ヒツジ	1		1						
イヌ	2		1		1	1	3		
シカ	1								
ネズミ		1		1		1		2	
ロバ		1		1					
サル						1			
キツネ						1		1	
ブタ						1			
ウシ		2		1	1				

表2を見ると、中国語に関する資料である1・2においても、日本語に関する資料である3・4においても数種の動物が挙げられているが、資料全体を通じて一義の擬音語を有する、カラスやイヌなど一部を除いて、擬音語で表現される動物の種類は、言語によって偏りがみられ、擬音語になりやすい動物は言語によって異なる。また、日本語に関する資料3・4では具体的な動物名が多く挙げられているのに対し、中国語に関する資料1・2では、「鳥」「虫」「動物のうなり声」といった具体性を欠く鳴き声が多く挙げられている。特に鳥類においては、その傾向が顕著で、中国語に関する資料1・2では、ほとんどが鳥一般の鳴き声として挙げられているが、日本語に関する資料3・4では、スズメ、ハト、山鳩、ヒバリそれぞれが類分けされている。また「雛鳥」など鳥の中でも、その鳴き声を詳細に分けている。このことから、中国語話者にとって、鳥そのものに対する心理的親密度は低くはないが、具体的な鳥の種類に対するそれは低く、日本語話者にとっては具体的な鳥の種類に対しても心理的親密度は高いことが窺える。

虫については、その鳴き声を認識するのは日本人だけの特徴のようにいわれる⁹ことが多いが、この表からは中国語においても、虫の鳴き声を表現する擬音語が日本語同様に存在し、中国語話者も虫の鳴き声を擬音語として位置づけしていることが認められる。特に具体的な虫の種類ではなく、「虫」一般の鳴き声に関しては、多義ではあるが少なからず存在し、虫に対する関心が、日本語に比べて低いとはいえない。このことは、中国の文学作品の中に、虫の声の描写が多々取り上げられることにその一端をみることができよう。以下に『唐代詩集』からその例を挙げる。

杜甫「促織」 促織甚微細 哀音何動人（略）（こおろぎ）
 鄭巢「秋思」 寒蛩鳴不定 郭外水雲幽（略）（こおろぎ）
 王維「秋夜獨坐」（略）雨中山果落 燈下草蟲鳴（略）（こおろぎ）
 李賀「秋來」 桐風驚心壯士苦 衰燈絡緯啼寒素（略）（こおろぎ）
 岑參「首秋輪臺」 秋來唯有雁 夏盡不聞蟬（略）（せみ）
 駱賓王「在獄詠蟬」 西陸蟬聲唱 南冠客思侵（略）（せみ）
 積齊己「新秋病中枕上聞蟬」 枕上稍醒醒 忽聞蟬一聲（略）（せみ）
 張喬「促織」 念爾無機自有情 迎寒辛苦弄梭聲（略）（こおろぎ）
 張仲素「秋閨思」 碧窓斜日靄暉 愁聽寒將淚濕衣（略）（せみ）
 謝朓「秋夜」 秋夜促織鳴 南隣擣衣急（略）（こおろぎ）

しかし、ここで対象となる虫は、セミとコオロギに集中していることから、言語によって意識する虫も異なっていることが窺える。

以上のことから、日本語話者は、中国語話者に比して、f. 物音以外の音を一般の語彙として取り入れやすく、従って日本語の擬音語は語彙化されやすい傾向にある。しかし c. 動物の鳴き声に関してのみ、各言語話者のそれぞれの動物に対する心理的親密度が強く作用し、とりあげる動物の種類によってそれは異なり、日中両言語間で語彙化の強弱を認めることは困難になると考えられる。

註

- 1 擬音語は、擬声語とも称され、また擬態語も含めた広義の意味で使用されることもあるが、本稿では音を表徴していると考えられるもののみを狭義の意味で扱う。
- 2 擬音語の語彙度と語彙化についての詳細な立場は、武田 2000 で論じたので、ここでは割愛する。
- 3 泉 1976
- 4 相原 1976
- 5 野口 1995 (概説)
- 6 全体における一義の割合から、擬音語の語彙度をみることの詳細な検討は、武田 2000 で論じたので、ここでは割愛する。
- 7 資料 1 : 野口宗親編『中国語擬音語辞典』1995 東方書店、資料 2 : 相原茂編「現代中国語擬音語小辞典」『中国語』1976,11 大修館書店、資料 3 : 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』1978 角川書店、資料 4 : 天沼寧『擬音語・擬態語辞典』1974 東京堂出版
- 8 武田 2000
- 9 泉 1976、野口 1979 など。

引用文献

- 泉邦寿 1976 「擬声語、擬音語の特質」『日本語の語彙と表現』大修館書店
- 小谷学他 1993 「言語による音声知覚の相違とオノマトペ」『オノマトピア：擬音・擬態語の楽園』勁草書房
- 鈴木孝夫 1962 「音交替と意義分化の関係について——所謂清濁音の対立を中心として——」『言語研究』第 42 号 日本言語学会 pp.23-30
- 武田みゆき 2000 「日中擬音語の語彙度——人間の活動に関する音と外界音を中心に——」『ことばの科学』第 13 号 名古屋大学言語文化学部言語文化研究会 pp.171-186
- 田中克己他編訳 1969『唐代詩集』（中国文学古典体系第 17、18 卷）平凡社
- 田守育啓 1989 「オノマトペをめぐる」『言語』第 11 号 大修館書店 pp.32-37
- 角田忠信 1974 「日本人と西欧人の文化型と音認識」『言語』大修館書店 pp.34-41

野口宗親他 1979 「中国語における擬声語語彙の研究」『熊本大学教育学部紀要』第 28 号 pp.11-19